聖霊降臨後第２主日（特定５）　　マタイという人物　　２０２３．６．１１．

今年は、聖餐式の聖書日課はＡ年で、福音書はマタイによる福音書を中心にして読んでゆくことになっています。そして、今日の福音書は、「マタイを弟子にする」という見出しの箇所ですので、今日は、マタイという人物のことについて、少し学んでみたいと思います。

今日は２つのことを話します。ひとつは、「マタイ」の名前についてです。マタイは、新約聖書の最初の書物、マタイによる福音書の著者であり、また１２人いる、イエス様の弟子たちのひとりなんですが、聖書の似たお話の箇所を見ると、「レビ」という名前の人物が浮かび上がってきます。

もし、今聖書をお持ちなら、６４ページ、マルコ２章１３節からの部分の見出しを見てください。今日の福音書と同じ内容の箇所なのですが「レビを弟子にする」と書かれています。これは、１１１ページのルカ５章２７節からの部分も同様に「レビを弟子にする」という見出しです。どうして、マタイによる福音書ではマタイであって、マルコとルカではレビなのか、という疑問が起こります。いろんな説があります。当時の人は２つ名前を持っていた、とか、ちょうど、漁師のシモンにイエス様が「あなたはペトロ」と名づけたように、もともとレビという名前だったのに、クリスチャンになったので、マタイと名乗るようになった、みたいな説があります。そしてまた、マタイが名前だけれど、彼の出身部族がレビ族だったので、レビ人マタイというのが正式名称だ、という人もいます。

そのあたり、はっきりした定説はありませんが、ローマ帝国の手下になって、人々から税金を取り立てる、徴税人であったことは確かなようです。そして、マルコによる福音書にだけ、「アルファイの子レビ」という表現が出てきます。レビとかマタイとか呼ばれるこの徴税人の父親はアルファイという名前だったのでしょう。ところが、マタイによる福音書１０章３節に、「徴税人のマタイ」に続いて、「アルファイの子ヤコブ」という名前が出てきます。イエス様の１２弟子には、「アンデレとペトロ」「ゼベダイの子のヤコブとヨハネ」というふた組の兄弟、４人の漁師がいたことがわかっていますが、そのほかにも「マタイ」と「ヤコブ」という二人の兄弟がいて、父はアルファイということなのかもしれません。

さて、そのようなマタイなんですが、この人は、自分自身が、同胞のユダヤ人から嫌われる徴税人であったことを、ハッキリと福音書の中に現しています。「マタイ」という人が十二使徒の中にいたことは、福音書や使徒言行録の弟子たちのリストのどれにも出てきます。マルコやルカでは、徴税人のレビとはマタイは別人のように、リストに出てきますが、マタイによる福音書のリストにだけは「徴税人のマタイ」という言い方が出てくるのです。マタイによる福音書を本当にマタイが書いたとすれば、それは、自分の過去の仕事をハッキリと人々に証ししたということになるでしょう。他のマルコやルカが使徒マタイに遠慮して、レビと書いたのとは違う、ということでしょう。

さて、この「マタイ」という名前なんですが、「神のたまもの」という意味のヘブライ語の名前だそうです。「神様が与えられた才能」ということになるのでしょうが、それは彼の行っていた徴税人の仕事から、イエス様に呼び出されて、それに従った、彼の回心。それまでのレビという名前だったのが、それから離れて、新しい仕事をする者になった、ということでしょう。

もう徴税人の職業がいかに嫌われていたか、説明する必要はないと思いますが、ローマ帝国から雇われて、徴税人の権利をお金で買い取りまして、それを使って、同胞からいろいろ難癖をつけて、税金を取り立て、ローマ帝国には、一定額のお金を払えば、あとは自分の懐に入れる、ということをやっていました。ですから、嫌われ者ですが、裕福な生活だったのでしょう。

このような人をユダヤ人は、罪人や娼婦と一緒にひとまとめで、救いから外れた者、というレッテルをつけて見られていたのです。

これは、私の推測ですが、マタイという名前は最初からこの人にはついていた。ところがイエス様の弟子になり、彼の指導する教会はとても影響力のある集団になった。そこで、最初に福音書をまとめたマルコによる福音書や、それをお手本にしてまとめたルカによる福音書は、１２弟子の名前のリストには、ちゃんとマタイを挙げているけど、マタイが弟子になる時の話は、彼が徴税人という、嫌われ者だったので、それをあからさまに描くのに躊躇して、「レビ」という彼の出身の部族か何か、別名でお話を書いたのではないか。ところが、当の本人であるマタイが福音書を書く時、そんな自分の過去を隠すようなことはしたくない、と思って、徴税人のマタイがイエス様に呼ばれて弟子になったお話をあからさまに書き、１２弟子の名前を書く時、「徴税人のマタイ」と、自分の前の職業を書いたのだと思います。

さて、もう一つ、マタイについて、その召しだしの物語と関連のある話をします。

このマタイが弟子になる話で、ひとつ注目しなければならないことがあります。それは今日印刷されている部分ではなく、この出来事の直前に出てくる話です。マタイの場合は、９章１節から８節の「中風の人をいやす」という奇跡物語です。この話が、マルコやルカでも、やはり徴税人レビを弟子にする話の直前に出てくるのです。イエス様がガリラヤ地方を回って伝道された後、ガリラヤ湖畔の町、イエス様が「自分の町」と呼ばれた、カファルナウムに帰られ、ある家で集会をしていたら、中風の人が担架にのせられたまま、運ばれて来た話です。このマタイの福音書では、あっさり運ばれて来たことになっていますが、マルコやルカでは、大勢の人が部屋の中にいたので、イエス様の所までたどりつけないから、屋上に上がって、屋根をはがして、吊り下ろした、というお話です。おそらく、屋根まではがすわけですから、近所でも騒ぎになったことでしょう。マタイもその様子を見ていたかもしれません。

この時イエス様は中風の人に向かって「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される。」とおっしゃいました。この言葉に引っかかった律法学者がいましたが、イエス様は「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい。」と言い方を変えておられます。

このどちらの言葉も大切なのではないか、と思うのです。

この奇跡が起こったあと、イエス様はその家を出て、マタイの前を通りかかるのです。おそらく、イエス様は、同じ町に住むマタイのことを前から知っておられたのでしょう。みんなから罪人のように思われていた徴税人です。マタイ自身、自分が嫌われ者であることを身に染みてわかっていたでしょう。こんな私が、活かされる道は他にないものだろうか。私の罪は赦されるだろうか。神様は私を受け入れてくださるだろうか。そんなことを考えていたかもしれません。

ところが、中風の人を「あなたの罪は赦される」「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」と、病人を立ち上がらせたイエス様は、今度はマタイに向かって声をかけ「わたしに従いなさい。」といわれたのです。彼は何も躊躇することなく、「立ち上がってイエスに従った」と書かれています。

これは、ただ、ふらふら付いていった、というものではありません。私にも新しい生き方ができるんだ、と、急に自分の前に道が開けたような気持ちになって、座っていた者が、決断して立ち上がる、大きな決断があったと思うのです。

「中風の人が癒された話」つまり、「罪が赦され、起き上がって歩き始めた」という出来事は、まるでその出来事のおさらいか、焼き直しのように、徴税人マタイにも、同じことが起こった、と言いたいのではないか、と思います。

この後、イエス様は、マタイの家に行って、彼の仲間である徴税人や罪人たち多くの人々と一緒に食事をします。イエス様の伝記などの映画を見ていると、イエス様に従った弟子たちも、裕福なマタイとは最初距離をおいていたように描いているものもたくさんあります。おそらく、ファリサイ派の人々が、弟子たちに「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」との批判に返す言葉が見つからなかったのではないでしょうか。ところがイエス様は「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と、はっきりと答えられました。

医者という言葉が出ました。この言葉はマタイの家でイエス様の口から出たことですので、マタイたち徴税人が病人にたとえられているのでしょうが、このような「医者とか病人」という言葉が出てくる伏線には、その直前、イエス様が中風の人を癒した出来事があって、説得力を持っているのだと思います。

さて、黄金伝説という聖人のことを紹介した大きな書物がありますが、その中に、使徒聖マタイについて、彼には４つの徳と言いましょうか、人格的に優れた点がある、と紹介されています。
１、呼ばれたら、どんな仕事中でもすぐに、呼びかけた主人に従う迅速さ。２、イエス様を歓迎するために盛大な宴会をした気前のよさ。盛大な愛とあこがれの気持ちでキリストをお迎えした。３、自分の過去の仕事、徴税人であったことを隠さず、言い表せる謙虚さ。そして人々の偏見の中にもそれに耐えて自分の仕事を全うしたこと。４、マタイによる福音書を書き残したこと。この福音書は、他の福音書よりも、よく利用されている。それをまとめたマタイの貢献。

私たちは、このマタイの回心の中に、私たちの歩むべき指針をみつけ、より一層、この福音書に親しみたいと思います。